

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第57集

# 館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成30年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

大袋5遺跡	(平30地点)
笹原遺跡	(平30地点)
二本松遺跡	(平30地点)
新宿二丁目遺跡	(平30地点)
日向新田遺跡	(平30地点)
青山屋敷跡	(平30A地点)
青山屋敷跡	(平30B地点)
岡野・屋敷前・岡遺跡	(平30地点)
青山屋敷跡	(平30C地点)

2019  
館林市教育委員会



## 例　　言

1. 本書は、平成30年度に国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金を受けて実施した館林市内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき以下のとおりである。平成30年度の調査地点名は「平30地点」とする。

おれんくら 大袋5遺跡	おれんくら 笠原遺跡	ほほんまつ 二本松遺跡	じんじゅくにちとうめ 新宿二丁目遺跡	ひなかしんでん 日向新田遺跡	あおやまやしきあと 青山屋敷跡
おかの 岡野・屋敷前・岡遺跡	おかの 青柳城跡	おかやぎとう 多々良沼遺跡			

3. 平成30年度の調査組織は次のとおりである。

調査主体者	館林市教育委員会
担当課	文化振興課(文化財係)
教育長	吉間 常明(～平成31年3月5日)
教育次長	青木 伸行
文化振興課長	戸叶 俊文
文化財係長	阿部 弥生
主任	奈良 純一(副担当)
主任	田沼 美樹
主任	宮田 圭祐(担当)
主事	小林 松嗣
主事補	小林 里穂

4. 調査作業員・整理作業員(50音順敬称略)

一鐵 謙	牛久保三郎	小倉 政義	久保田憲司	小島 鉄男	杉田 和実
須永 欣伸	関口 芳友	田村 秀実	寺鶴 美雪	西谷 義信	萩原 充
原田 和沙	前田 清美	三橋 瑞江	八代 昌明		

5. 出土遺物・調査記録および資料は、館林市教育委員会で保管している。

6. 本書の編集・執筆は、宮田が中心となり行った。

7. 遺物の実測・観察表およびその他の図版作成は、宮田・原田・前田・三橋で行った。

8. 調査の実施および本書刊行にあたり、下記の方々のご協力をいただいた。ここに記して感謝申しあげる次第である。(順不同、敬称略)

地権者各位	荒井孫四郎	川島 正一	黒澤 照弘	笠澤 泰史	日向漁業協同組合
群馬県教育委員会事務局文化財保護課	館林市木事務所			館林市都市建設部都市計画課	
館林市政策企画部税務課	館林市農業委員会事務局				

## 凡　　例

1. 本書における挿図の縮尺は、図中に記した。「出土遺物写真」の縮尺は1/2を基本とした。

2. 遺跡位置図等は、平成22年度(一部平成25年度)発行の館林市都市計画基本図を用いた。

3. 土層断面および出土遺物の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修「新版土色帖」に従った。一部、調査担当者の目視による判断も含まれる。

## 参　考　文　献

群馬縣邑樂郡多々良村役場 1928『群馬縣邑樂郡多々良村誌』

深澤敦仁 2008『太田地域における古墳時代前期の土器編年試案』『成塚向山古墳群』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第426集

笠澤泰史 2007『群馬県における古代製鉄遺跡の出現と展開』『群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』25 館林市教育委員会『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集～第56集

館林市教育委員会 2010『館林市史 特別編第4巻 館林城と中近世の遺跡』

館林市教育委員会 2011『館林市史 資料編1 館林の遺跡と古代史』

館林市教育委員会 2015『館林市史 通史編1 館林の原始古代・中世』

山崎 一 1978『群馬県古墳墓址の研究 上巻』

# 目 次

例 言

凡 例

参考文献

目 次

挿図目次

写真図版目次

第1章 館林市の環境

1. 地理的環境.....	6
2. 歴史的環境.....	6 · 7

第2章 試掘・確認調査の概要

1. 大袋5遺跡(平30地点).....	8 ~ 10
2. 笹原遺跡(平30地点).....	10 ~ 12
3. 二本松遺跡(平30地点).....	13
4. 新宿二丁目遺跡(平30地点).....	14 ~ 16
青柳城跡.....	16
5. 日向新田遺跡(平30地点).....	17 ~ 21
多々良沼遺跡.....	22 ~ 23
6. 青山屋敷跡(平30A地点).....	24 ~ 26
7. 青山屋敷跡(平30B地点).....	26
8. 青山屋敷跡(平30C地点).....	27
9. 岡野・屋敷前・岡遺跡遺跡(平30地点).....	28 ~ 30
遺物観察表.....	31 ~ 32

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

第1図 館林市の位置.....	6	第17図 日向新田遺跡の範囲と調査地.....	17
第2図 館林市の地形概念図.....	7	第18図 調査区位置と遺構配置.....	18
第3図 平成30年度調査遺跡位置.....	7	第19図 調査区位置と遺構配置.....	19
第4図 大袋5遺跡の範囲と調査地.....	8	第20図 出土遺物.....	21
第5図 調査区位置と遺構配置.....	9	第21図 多々良沼遺跡の範囲と踏査地.....	22
第6図 出土遺物.....	10	第22図 採取遺物.....	22
第7図 笹原遺跡の範囲と調査地.....	10	第23図 採取遺物.....	23
第8図 出土遺物.....	11	第24図 青山屋敷跡 A の範囲と調査地.....	24
第9図 調査区位置と遺構配置.....	12	第25図 調査区位置と遺構配置.....	25
第10図 二本松遺跡の範囲と調査地.....	13	第26図 青山屋敷跡 B の範囲と調査地.....	26
第11図 出土遺物.....	13	第27図 A · B 出土遺物.....	26
第12図 新宿二丁目遺跡の範囲と調査地.....	14	第28図 青山屋敷跡 C の範囲と調査地.....	27
第13図 調査区位置と遺構配置.....	15	第29図 出土遺物.....	27
第14図 出土遺物.....	16	第30図 岡野・屋敷前・岡遺跡の範囲と調査地 .....	28
第15図 青柳城跡の範囲と対象地.....	16	第31図 調査区位置と遺構配置.....	29
第16図 出土遺物.....	16	第32図 出土遺物.....	30

# 写 真 図 版

## 大袋5遺跡(平30地点)

- 1- 1 土木重機による掘削
- 1- 2 トレンチ1溝1(北面)
- 1- 3 トレンチ1性格不明遺構(西から)
- 1- 4 発掘作業風景
- 1- 5 トレンチ2精査後(南から)
- 1- 6 トレンチ2土層断面(西面)
- 1- 7 調査完了

## 新宿二丁目遺跡(平30地点)

- 4- 1 土木重機による掘削
- 4- 2 トレンチ1土層断面(南面)
- 4- 3 トレンチ1精査後(南から)
- 4- 4 トレンチ3精査後(西から)
- 4- 5 トレンチ4精査後(東から)
- 4- 6 トレンチ4水路跡(北面)
- 4- 7 調査完了

## 青山屋敷跡(平30A地点)

- 7- 1 調査区全景
- 7- 2 土木重機による掘削
- 7- 3 トレンチ1精査後(西から)
- 7- 4 トレンチ1土坑3
- 7- 5 トレンチ1土層断面(南面)
- 7- 6 トレンチ2精査後(東から)
- 7- 7 土木重機による埋め戻し

## 笹原遺跡(平30地点)

- 2- 1 調査区全景
- 2- 2 土木重機による掘削
- 2- 3 トレンチ1精査後(西から)
- 2- 4 トレンチ2精査後(北から)
- 2- 5 トレンチ3精査後(北から)
- 2- 6 トレンチ2土層断面(西面)
- 2- 7 調査完了

## 日向新田遺跡(平30地点)

- 5- 1 調査区全景
- 5- 2 トレンチ2精査前(東から)
- 5- 3 トレンチ2住居2精査前(南西から)
- 5- 4 トレンチ2住居2遺物出土状況(南から)
- 5- 5 トレンチ2深掘部土層断面(西面)
- 5- 6 トレンチ2住居2北端の礫
- 5- 7 トレンチ2住居2北端の礫(南から)
- 6- 8 トレンチ2住居2土層断面
- 6- 9 トレンチ2住居2出土遺物
- 6-10 トレンチ2住居2精査後(南北から)
- 6-11 トレンチ3住居3精査前(北西から)
- 6-12 トレンチ3住居3土層断面(北から)
- 6-13 トレンチ3住居3精査後(北東から)
- 6-14 土木重機による埋め戻し
- 6-15 調査完了

## 青山屋敷跡(平30B地点)

- 8- 1 土木重機による掘削
- 8- 2 トレンチ2精査前(西から)
- 8- 3 トレンチ2精査後(西から)
- 8- 4 トレンチ1精査後(東から)
- 8- 5 トレンチ2土層断面(南面)
- 8- 6 土木重機による埋め戻し

## 二本松遺跡(平30地点)

- 3- 1 調査区全景
- 3- 2 土木重機による掘削
- 3- 3 トレンチ1精査後(北から)
- 3- 4 トレンチ2精査後(北から)
- 3- 5 トレンチ2深掘部土層断面(北面)
- 3- 6 調査完了

## 青山屋敷跡(平30C地点)

- 9- 1 調査区全景
- 9- 2 土木重機による掘削
- 9- 3 精査前(東から)
- 9- 4 精査後(東から)
- 9- 5 深掘部土層断面(東面)
- 9- 6 溝1(南面)
- 9- 7 調査完了

## 岡野・屋敷前・岡遺跡(平30地点)

- 10- 1 調査区全景
- 10- 2 土木重機による掘削
- 10- 3 トレンチ1精査後(北から)
- 10- 4 トレンチ2溝2
- 10- 5 トレンチ2溝3
- 10- 6 調査完了(1)
- 10- 7 調査完了(2)

## 出土遺物写真

# 第1章 館林市の環境

## 1. 地理的環境

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市である。市域は東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約60km<sup>2</sup>である。北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町に、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町に接する。明和町の南には利根川が東流し、群馬県と埼玉県の県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約50km、東京(台東区浅草)へも約65kmの距離にあり、東京圏との結びつきも強い。

群馬県南東部は、「邑楽・館林」地域と呼ばれ、標高15m台(大島町東部)から33m台(高根町)の平坦な低地である。本市の地形を概観すると、「洪積台地」と「沖積低地」に分けることができる。市街地が立地する「洪積台地」が東西に延び、その周辺に「沖積低地」が広がる。

この洪積台地は「邑楽・館林台地」と呼ばれており、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から本市高根町にいたる台地の北側に沿って、日本最古(約6~7万年前)の砂丘の一つである埋積河畔砂丘(館林古砂丘)が走っており、本市最高標高点(33.2m)はこの上にあった。

「沖積低地」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された。台地北側の低地帯には、旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向がみられ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は樹枝状に開析され、沖積低地に延びる多くの谷地を形成している。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東西に走る鶴生田川および城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地の谷には茂林寺沼・蛇沼・近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴の一つとなっている。

## 2. 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は147ヶ所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』(市内遺跡詳細分布調査報告書)には、そのうちの144ヶ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した各時代の遺跡数は、次のとおりである(複合した時代の遺物散布地が見られるため、その中心になると考えられる時代でまとめた)。

旧石器時代は4遺跡(遺物は9遺跡で確認)、縄文時代は10遺跡(縄文土器のみ採取できた遺跡)、弥生時代は2遺跡(遺物は5遺跡で確認)。古墳時代~平安時代(土師器の出土した遺跡)は93遺跡(うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は41遺跡)。古墳は18遺跡(古墳総数25基)、中世以降の生産址1遺跡、中世~近世の城館址は15遺跡、城館以外で中世・近世の遺物が多く出土するのは4遺跡である。

これらの遺跡の分布は地形的な特徴と大きく関わっており、館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりをおおまかに述べると、次のようになる。

### 《旧石器時代》

この時代の遺跡は、山神脇遺跡や水溜第一地点遺跡・同第二地点遺跡など、邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる埋積河畔砂丘上で多く分布している。また、大袋II遺跡や間堀1遺跡など低地を望む台地の突端の遺跡でも当該期と考えられる資料が確認されている。

### 《縄文時代》

この時代になると、遺跡数が増加し洪積台地上に遺跡が分布する。前期や中期の遺跡は、加法師遺跡や間堀1遺跡など、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に集落を形成している。確認できる遺跡数は後期以降減少するが、洪水堆積層の下で確認できることが多く、より低地で痕跡が残される傾向がある。

### 《弥生時代》

弥生時代の遺構は確認されていないが、大袋I遺跡や小林遺跡など微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。

### 《古墳時代》

前期の遺跡は少ない。道溝遺跡は洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在しており、この傾向は弥生時代の遺物散布に似ている。中期には遺跡の数が増えるとともに、その所在は台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。後期には遺跡数は増大し、北近藤第一地点遺跡や当郷遺跡など台地上の平坦部に所在する場合が多い。墳墓としての古墳は、推定地も含め33基が残存している(『館林市史 資料編1』参照)。古墳群が2ヶ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする埋積河畔砂丘上にある。そのほかに単独のものも多いが、そのいずれも谷や谷地等を見おろす洪積台地上に所在し



第1図 館林市の位置

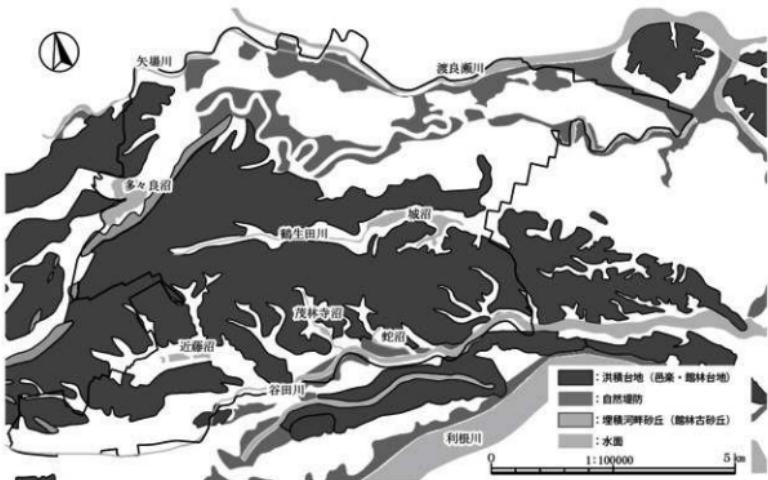
ている。

#### 『奈良・平安時代』

この時代の遺跡の痕跡は多く残る。台地の端部に限定されず遺物の採取ができるところから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が営まれていたと考えられる。

#### 『中世・近世』

この時代の城館址については、伝承的な要素が多く実態は判然としない。しかし、谷や小河川などの自然地形を利用し中世末には館林城が、近世には館林城を中心として城下町が形成され、その町割りは今も残っている。



第2図 館林市の地形概念図



第3図 平成30年度調査遺跡位置

## 第2章 試掘・確認調査の概要

### 1. 大袋5遺跡(平30地点)

遺跡番号	0068
時代種別	平安(散布地)
調査地	館林市花山町26-7、26-8、26-12、26-13
調査原因	店舗
調査期間	平成30年4月21日～5月3日 〔内6日間〕
調査面積	約73m <sup>2</sup>

#### (1) 遺跡と周辺の環境

「大袋5遺跡」は館林市の東部にある平安時代の散布地である。邑楽・館林台地の東部で、城沼南岸の舌状台地上に広がっており、畑も残るが区画整理を契機に近年は住宅地などの開発が盛んである。

本遺跡ではこれまでに1地点(平12地点)で調査が行われている。今回届出のあった土地は遺跡の南端付近に位置し、古城沼へと続く崖線部の地点であり、基準点の標高は19.802mである。

#### (2) 調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、東西方向1本、南北方向に1本のトレーナーを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

#### (3) 基本層序

I層は表土(層厚約110cm)である。長期にわたり駐車場として利用されており、碎石(20cm)盛土(30cm)碎石(60cm)である。II層は黒褐色土層(7.5YR2/2)を中心とした腐植土層であり、粘性ではなく、上からの填圧の影響か縮まりがある。上層の鉱物を含む層はAs-Bの可能性もある。下層のローム層との境界は粘性がある(層厚約40cm程度)。III層はローム層(にぶい 黄褐色10YR4/3)であり、粘性あり、縮まりなし、湿性のローム層。IV層は暗色帶(暗褐色10YR3/3)である。粘性あり、縮まりややあり。T2深掘部で確認。V層は暗褐色土層(10YR3/4)で粘性あり、縮まりあり。湿性であり、この層以下で湧水。IV層より色味が明るく中部ローム層であると考えられる。

#### (4) 確認された遺構

性格不明遺構2、溝4条、土坑3基が確認された。各遺構とも出土遺物はなくその詳細は不明である。

性格不明遺構1は現地表面から一番深いところで確認され、性格不明遺構2を掘り込んでいる。しかし、堆植物は同質であり時間的差異はほとんどないと推察される。トレーナー外に延びており、端部も確認できず、掘り込みも浅く遺物も出土しないことから住居ではなく性格不明遺構とした。溝はそれぞれローム層まで掘り込んでいる。遺物はなく時期は判然としないが、II層の上部にAs-Bが堆積しているとするならば、天仁元年(1108)以前の遺構となる。

#### (5) 出土遺物

確認された遺物は、縄文土器片、陶器片を中心に20点程度であるが、小破片であり時期は判然としないものも多い。数点ではあるが出土した縄文土器片はRLによる施文がほとんどであった。天目茶碗など近世陶器も出土している。

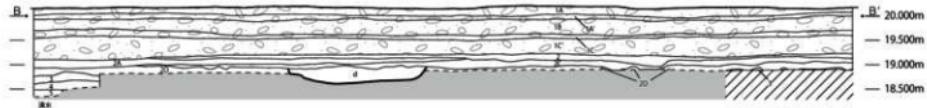
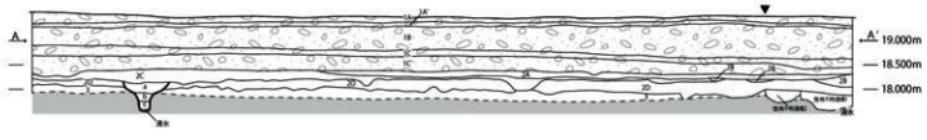
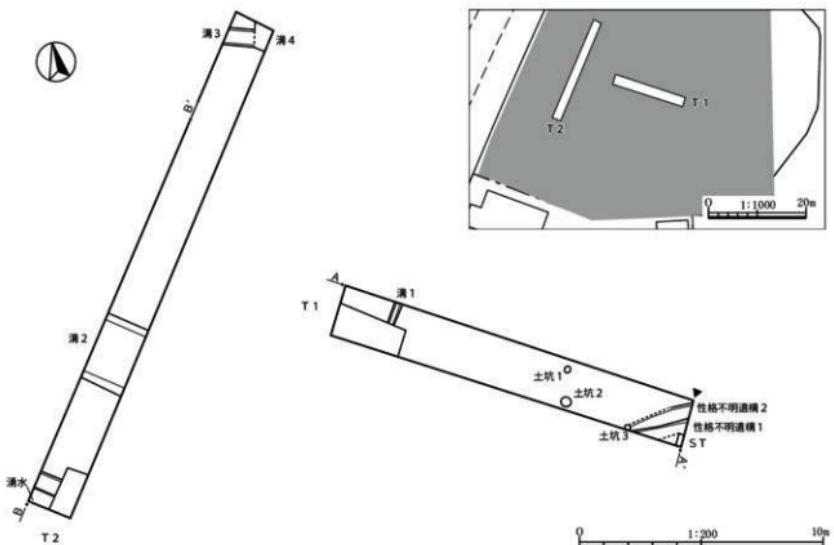
#### (6)まとめ

大袋5遺跡ではこれまでに平成12年度に調査が行われており、近世以降の溝と、縄文土器・土師器・近世陶器などが出土している。

平12地点では25cm程度でローム層を確認していたが、今回の地点では浅いところでも現地表面より150cm程度下であった。周辺の標高ではあるが、昭和33年の地形図と調査で使用した基準点の標高はほぼ変わらないため、現代の土地利用の結果沈降した可能性が考えられる。

本地点ではほとんど遺物は出土しなかったが、入り込んできている古城沼に向かい落ち込んでいく様子と、後世の開発による影響が確認された。

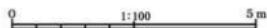
調査の結果、溝や性格不明遺構を確認したことから、開発計画者との協議が必要と判断した。



- I  
 1A 砕石 現表土  
 1B 砕石 1Aより大きさ<3cm程度、下層の上部と混同  
 1C 盛土 2cm以上の小石を10%含む  
 1C' 砂利  
 1C'' 砕石  
 2A 黒褐色 7SYR3/1 黏性なし、縫まりあり  
 2B 黑褐色 7SYR3/1 黏性なし、縫まりあり(薄塗り)  
 2C 黑褐色 7SYR2/2 黏性なし、縫まりあり  
 2D 黑色 7SYR2/2 黏性縫まりやあり  
 3 にぶい 黄褐色 10YR4/3 黏性あり、縫まりなし 濁性 ローム層  
 IV 4 黑褐色 10YR3/3 黏性あり、縫まりやあり  
 V 5 黑褐色 10YR3/4 黏性縫まりあり 濁性

- 土坑 1 a 黑褐色 7SYR2/2 黏性縫まりあり 棕色粒 7SYR6/6を10%程度含む  
 b 黑褐色 10YR3/2 黏性縫まりあり  
 c 棕色 10YR4/4 黏性あり、縫まりややあり b層がまだらに入る  
 溝 2 d 黑褐色 10YR2/2 黏性縫まりあり ローム粒 10YR5/4を10%含む

第5図 調査区位置と遺構配置



#### (7) その後の対応

施工責任者と調整を計り、計画図面と照し合せたところ、基本的な掘削は保護層が確保されていることと、柱状に埋め込む大型基礎の直下に遺構はあたらないことから、開発計画者に対し「慎重工事」を依頼する旨を通知した。



第6図 出土遺物

## 2. 笹原遺跡(平30地点)

遺跡番号	0101
時代種別	旧石器・縄文・平安(散布地)
調査地	館林市堀工町字笹原1882-4
調査原因	その他開発(建売分譲用地)
調査期間	平成30年6月5日～6月19日 〔内5日間〕
調査面積	約63m <sup>2</sup>

### (1) 遺跡と周辺の環境

「笹原遺跡」は館林市の南部にある旧石器・縄文・平安の散布地である。邑楽・館林台地の南端で、茂林寺沼へと延びる樹枝状の谷を望む舌状台地上に広がっており、周囲には茂林寺や県指定天然記念物「茂林寺沼及び低地湿原」など自然が多く残る地域であるが、近年は住宅地などの開発が盛んである。

本遺跡ではこれまでに12地点(A・B、平9・10・16A・16B・26・27・29A・29B・29C・29D)で調査が行われている。今回届出のあった土地は遺跡の北端付近に位置し、茂林寺川が流れる谷に面した崖線部の地点であり、基準点の標高は19.714mである。

### (2) 調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、東西方向に1本、南北方向に2本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

### (3) 基本層序

本遺跡の基本層序はI層～IV層である。

I層は表土(層厚最大約35cm)である。腐植土と根攪乱が多く、伐根などの際に混入したプラスチック片などゴミも目立つ。II層は黒色土層であり、粘性あり、締まりなし。泥炭化が進んでおり細かい有機物を含



第7図 笹原遺跡の範囲と調査地

む。T 1を中心にはT 2・T 3の北側で確認(2C層、2C'層など鉱物などでざらつきがあり、As-bなどの火山灰の可能性があり)。Ⅲ層はローム漸移層(にぶい黄褐色10YR4/3、黒色10YR2/3、黒褐色10YR3/2)であり、粘性・締まり強い。T 2・T 3で確認された。北にいくにつれて湿性、黒色が強くなる。Ⅳ層はローム層(褐色10YR4/6)である。粘性・締まり強い。場所により湿性の度合いが異なる。T 1では確認されなかった。

(4)確認された遺構

遺構は確認されなかった。

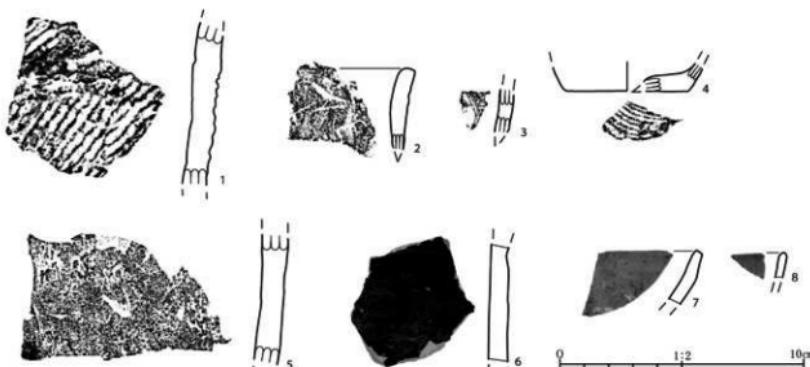
(5)出土遺物

確認された遺物は、縄文土器片、近世陶磁器片などを中心に10点程度であるが、小破片であり時期の判然としないものも多い。剥片も確認された。

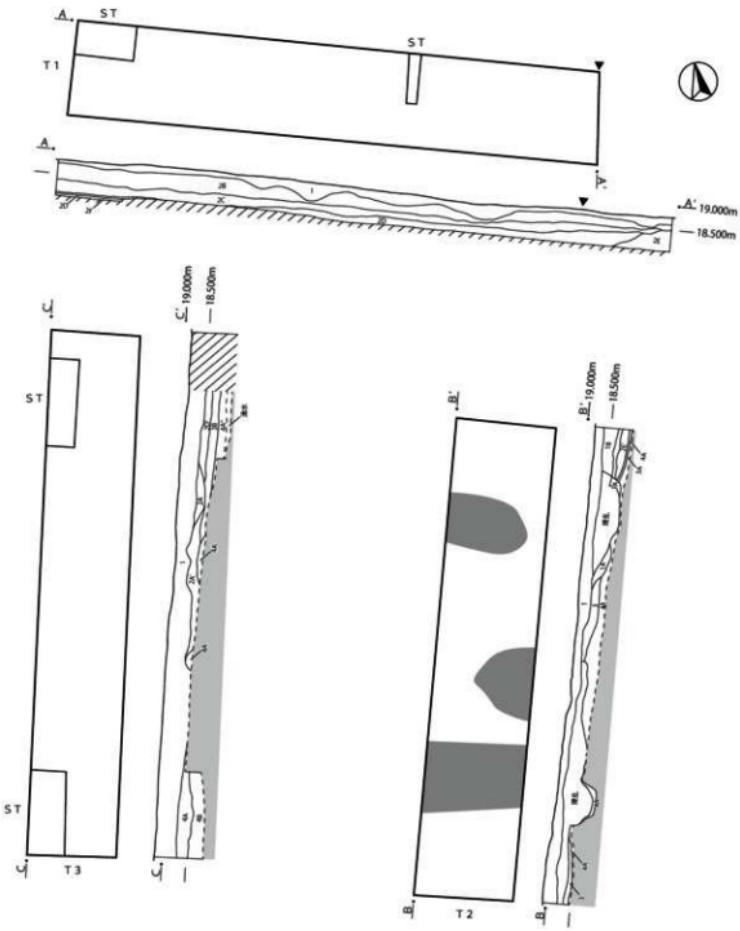
(6)まとめ

笠原遺跡ではこれまでに12度の調査が行われており、本地点は平29D地点の隣接地である。遺物はほとんど出土しなかったが、台地上から急激に落ち込んでいく様子が確認された。

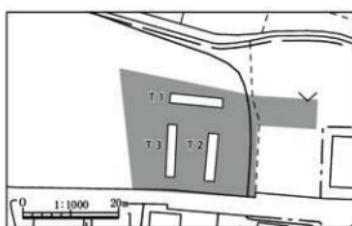
調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかつたことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第8図 出土遺物



- I 1 黒褐色 10YR2/2 T1のみ黒色の層が堆積し、T3では北側にいくにつれ黒味を帯びている  
2 黒褐色 10YR2/1 硬塑性の土質で、表面に少しがこちん層  
3 黑褐色 10YR2/1 粘性を含む  
2A 黑褐色 10YR2/1 粘性を含む  
2B 黑褐色 10YR2/2 粘性を含む  
2C 黑褐色 10YR2/2 粘性を含む  
2D 黑褐色 10YR2/2 粘性を含む  
2E 黑褐色 7SYR2/2 粘性を含む  
2F 黑褐色 10YR2/2 粘性を含む  
2G 黑褐色 10YR2/2 粘性を含む  
3 黑褐色 10YR2/3 粘性を含む  
3A 黑褐色 10YR4/3 粘性を含む  
3B 黑褐色 10YR3/2 粘性を含む  
4 黑褐色 10YR4/2 粘性を含む  
4A 黑褐色 10YR4/4 粘性を含む  
4B 黄褐色 10YR5/4 4Aより液性  
4C 黄褐色 10YR4/3 4Aより液性  
4D 黄褐色 10YR5/6 ローム層



第9図 調査区位置と遺構配置

### 3. 二本松遺跡(平30地点)

遺跡番号 0050  
 時代種別 繩文・古墳・平安(散布地)  
 調査地 館林市大谷町二本松28-2  
 調査原因 個人住宅  
 調査期間 平成30年9月19日～10月2日  
 (内5日間)  
 調査面積 約52m<sup>2</sup>

#### (1) 遺跡と周辺の環境

「二本松遺跡」は館林市の西部にある縩文・古墳・平安の散布地である。邑楽・館林台地上で鶴生田川の南岸に広がっており、近年は住宅団地造成に伴い宅地化が進んだ。



第10図 二本松遺跡の範囲と調査地

本遺跡ではこれまでに1地点(平7地点)で調査が行われている。今回届出のあった土地は遺跡の西端付近に位置し、鶴生田川の氾濫原に隣接する地点であり、基準点の標高は22.142mである。

#### (2) 調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、南北方向に2本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

#### (3) 基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅳ層である。

Ⅰ層は表土(層厚最大約40cm)である。擾乱土、最大5cmほどのローム粒を斑に含む。土地の造成の可能性がある。Ⅱ層は黒褐色土層(10YR2/2)であり、粘性・締まりなし。T2では黒色土層(10YR2/1)が確認され(2B層)、2A層より粒子が細かく削ると崩れるほど締まりがない。Ⅲ層はローム漸移層(黒色10YR3/2)であり、粘性あり、締まりややあり。Ⅳ層はローム層と想定される。にぶい黄褐色(10YR5/4)に黒褐色(10YR3/2)が斑に50%程度入る(4A層)。南にいくにつれて、黒褐色の割合が増える。粘性・締まりあり。4A層(黒褐色10YR3/2)は粘性あり、締まりなし。湿性で、T2南端の深掘部で特に湿っている。暗赤色の可能性もあるが不明。4B層(10YR4/2)は、粘性ややあり、締まりなし。湿性で粒子が細かく砂混じり。

#### (4) 確認された遺構

遺構は確認されなかった。

#### (5) 出土遺物

確認された遺物は、近世陶磁器片を中心に10点程度であるが、小破片であり時期の判然としないものも多い。

#### (6) まとめ

二本松遺跡では平成7年度に調査が行われている。住宅団地建設工事に伴う事前調査であり(I区～Ⅲ区)、縩文時代から古墳・平安時代の土器の小破片が出土した。

本地点ではほとんど遺物は出土しなかった。堆積状況は、T2の北部で明瞭なロームを確認できた(平7地点ではⅢ区の南西側とされる)。T2の南北2ヶ所の深掘部では、同一レベルまで掘り下げたが(21.400m)、南側では湿性が高く、水が染み出す手前であった。南側にいくにつれて色調が濃く暗くなるのは湧水の影響と考えられる。鶴生田川が洪積台地を開拓したとするならば、微地形や鶴生田川に流れ込む水みちの可能性も考えられる。

また、T1では重機による爪の痕跡が確認されたが、聞き取り調査によると住宅団地造成後は空き地であったとの話であり、調査対象地内に下水道管や水道の引込管があることから、住宅団地造成の際に布設され擾乱を受けたと想定される。

調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第11図 出土遺物

#### 4. 新宿二丁目遺跡(平30地点)

遺跡番号	0061
時代種別	縄文・中世・近世(散布地)
調査地	(從前地)館林市新宿二丁目 138-6、181-4、179-1 (仮換地)西部第一南土地区画 整理事業93街区4
調査原因	その他建物(分譲住宅)
調査期間	平成30年10月16日～10月23日 (内5日間)
調査面積	約145m <sup>2</sup>

##### (1) 遺跡と周辺の環境

「新宿二丁目遺跡」は館林市の市街地から南西に位置する縄文・中世・近世の散布地である。邑楽・館林台地上で、周辺は畑や住宅地として利用されている。

本遺跡ではこれまでに4地点(平22A・22B・23・29地点)で調査が行われている。

今回届出のあった土地は遺跡の東端付近に位置する点であり、基準点の標高は20.802mである。

##### (2) 調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、南北・東西方向に4本のトレンチを設定し、土木機械により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

##### (3) 基本層序

本遺跡の基本層序はI層～V層である。

I層は表土(層厚最大約100cm)である。現地表面(水田)、旧耕作土面、客土など。II層は黒褐色土層(10YR3/2)であり、粘性・締まりややあり。III層は上部ローム層(褐色10YR4/6)で、粘性・締まりあり。IV層は暗色帶(黒褐色10YR2/3)で、粘性・締まりあり。T1とT4で確認。V層は中部ローム層(褐色10YR4/6)、粘性・締まりあり。湿性。

##### (4) 確認された遺構

T4で溝1条と、T2～T4にかけて近代の水路跡が確認された。水路は南北方向に延びており、現在は使われていないが、調査区の西側や北西にその痕跡を見ることができる。

##### (5) 出土遺物

確認された遺物は、近世～近現代の陶器片を中心に50点程度であるが、小破片であり時期は判然としないものが多い。また黒曜石製の石核と剥片が出土したが、土地造成時の客土からの流れ込みの可能性も想定される。

##### (6)まとめ

新宿二丁目遺跡ではこれまでに4地点で調査が行われている。特に平成22年度の調査では柱穴列と、中世のカワラケと陶器が確認されている。

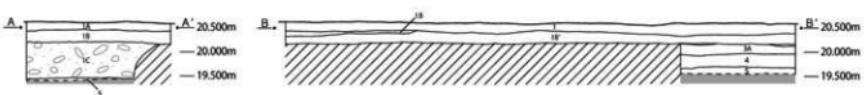
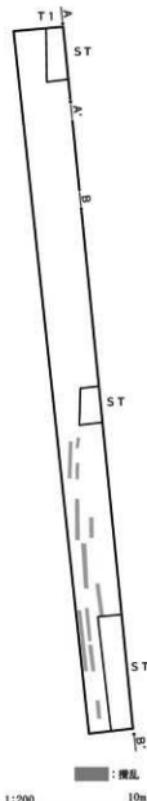
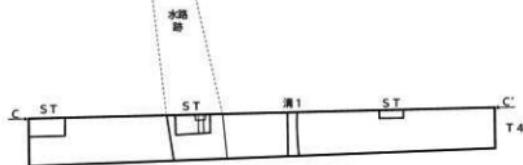
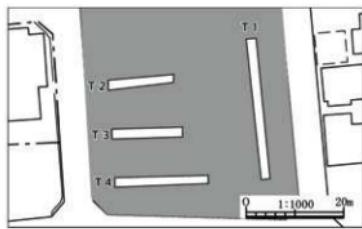
本地点ではほとんど遺物は出土しなかった。堆積状況は、T1南部・T4東部以外で土地の造成工事の影響を受けている。工事は昭和63年に実施され、旧耕作土を南に寄せ、客土(碎石・砂含む)を搬入し、耕作面を高くしたようである。水路はその後埋め立てたようであり、その様子が堆積からも確認できた。埋土中より炭酸饮料の300ml瓶が出土したことから平成に入った直後と想定されるが正確な年代は不明である。

また、T1南部では機械による掘削(幅20cm程度)の痕跡や、耕運機による刃の跡が確認された。

調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。

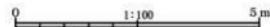


第12図 新宿二丁目遺跡の範囲と調査地

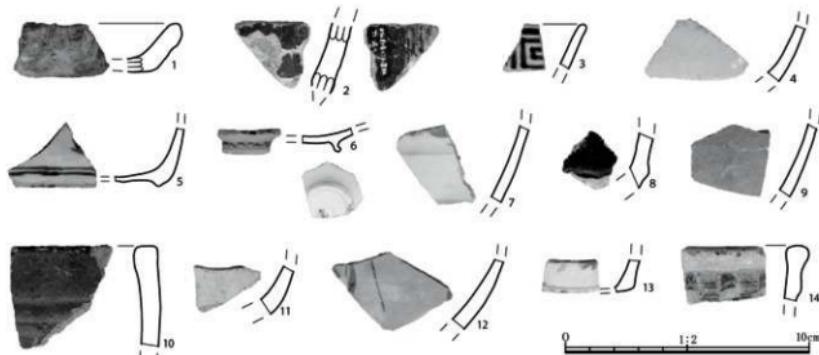


- I 1A 水田耕作土  
1B 土壌形成時の堆土。ロームを多く含む。旧耕作土か  
1C 黄褐色 10YR4/2 粘性あり、締まりなし。斑駁を10%程度含む。下部は純い黄褐色 SYR4/4 粘性締まりなし  
II 2A 堆土。底面の大部分で見られる。土壌形成(563)ものと考えられる  
III 3A 色 10YR4/6 粘性締まりあり。塑性。ローム層  
IV 4 黒褐色 10YR2/3 粘性締まりあり。暗色帶  
V 5 色 10YR4/6 粘性締まりあり。湿性 中部ローム層

- a 埋瓦し隙のロームブロック  
b 残土が 最大 5 cm程度の小石を 5 % 含む  
c 黄褐色 10YR4/2 粘性あり、締まりなし 5 cm程度のロームブロックを含む 墓壇土  
d 2A層に近いか 粘性ありやや  
e 褐褐色 10YR4/1 粘性あり、締まりなし。細砂を含む  
f 黑褐色 10YR4/2 粘性なし、締まりややあり やや粗い砂を含む  
埋土の下から確認されたことから、水路に伴うものと考えられる



第13図 調査区位置と遺構配置



第14図 出土遺物

### 【青柳城跡】

遺跡番号 0099  
時代種別 中世(城館跡)  
調査地 館林市青柳町鹿島道北685-15  
調査原因 個人住宅  
立会日 平成31年3月18日

#### (1)遺跡と周辺の環境

「青柳城跡」は館林市の南部に位置する中世の城館跡である。東西が低地と接する微高地で、西は谷田川北岸の低地に接する。現況は農地としての利用が主である。

本遺跡では昭和62年度に調査が行われ、中近世のカワラケが出土している。

#### (2)調査の概要

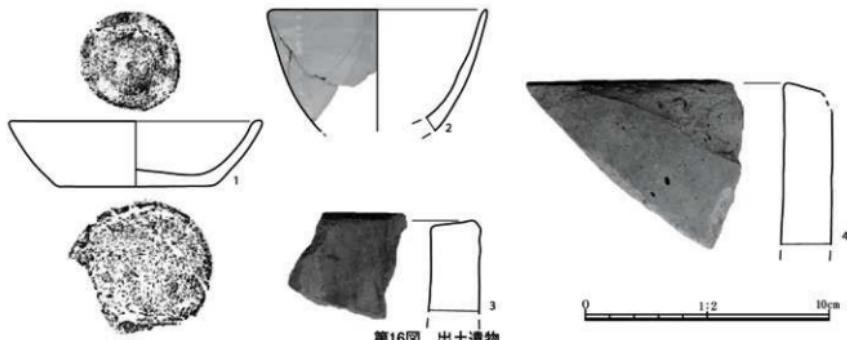
合併浄化槽設置の際に立会いを実施した。表土直下の土坑より一括で遺物が出土した。

#### (3)出土遺物

確認された遺物は4点である。1はカワラケで、中世末～近世の資料と考えられる。3・4は平瓦で、表面に塗付された滑石により光沢をもつ。近世以降の資料と考えられる。



第15図 青柳城跡の範囲と対象地



第16図 出土遺物

## 5. 日向新田遺跡(平30地点)

遺跡番号 0005  
時代種別 繩文・中世・近世(散布地)  
調査地 館林市日向町字新田1572-3  
調査原因 個人住宅  
調査期間 平成30年10月24日～11月1日  
(内7日間)  
調査面積 約28m<sup>2</sup>

### (1) 遺跡と周辺の環境

「日向新田遺跡」は館林市の西部にある繩文・中世・近世の散布地である。多々良沼を望む台地の南辺部に広がっており、古くからの住宅と農地が残る。

本遺跡ではこれまで調査は実施されていない。

今回届出のあった土地は遺跡の南端付近に位置し、沼へと続く旧道沿いの地点であり、基準とした標高は約23.8mである。

### (2) 調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、南北・東西方向に3本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

### (3) 基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅳ層である。

Ⅰ層は表土(層厚最大約30cm)である。耕作土。Ⅱ層はローム漸移層(にぶい黄褐色10YR4/3)であり、粘性ややあり・縮まりなし。Ⅲ層は上部ローム層(明褐色75YR5/6)で、粘性・縮まりあり。Ⅳ層は暗色带と想定されるが(にぶい黄褐色10YR4/3)、色味が明るい。粘性あり固く縮まる。

### (4) 確認された遺構

各トレンチで住居址が確認された(住1～住3)。住居址は古墳時代前期のものと想定される。市内でも当該期の関連資料は道溝遺跡・加法師遺跡・大島下悪途遺跡・大袋城跡・大袋4遺跡で確認されているが、古墳時代前期の遺構として明記されているのは昭和45年度に実施された道溝遺跡の事例である。しかし、どの住居址(住1はプラン未確認)も大きさが2.5m四方に収まる程度であり小規模な点は疑問が残る。また、床面から焼土は確認できたが、その広がりや炉・柱穴が確認できなかった点からも住居址以外の用途の可能性も視野に入れる必要がある。

覆土の堆積状況は住2が黒色土(10YR2/1)と黒褐色土(10YR3/2)に分層され、下層の上部に硬化層があり、張床と考えられる。遺物の出土は上層が中心である。住3は暗褐色土(10YR3/4)が堆積しており、一部掘り込み部分に最大3cm程度のロームブロックを含む。東(少し地山が高い)から南東部にかけて焼土(赤褐色5YR4/8)の硬化面が確認できた。

住2の北端から焼土と、礫3点が確認された。焼土の範囲と堆積を確認するために周辺を掘り下げたが、焼土の堆積は薄く、礫の下部からも遺物等の出土はなかった。

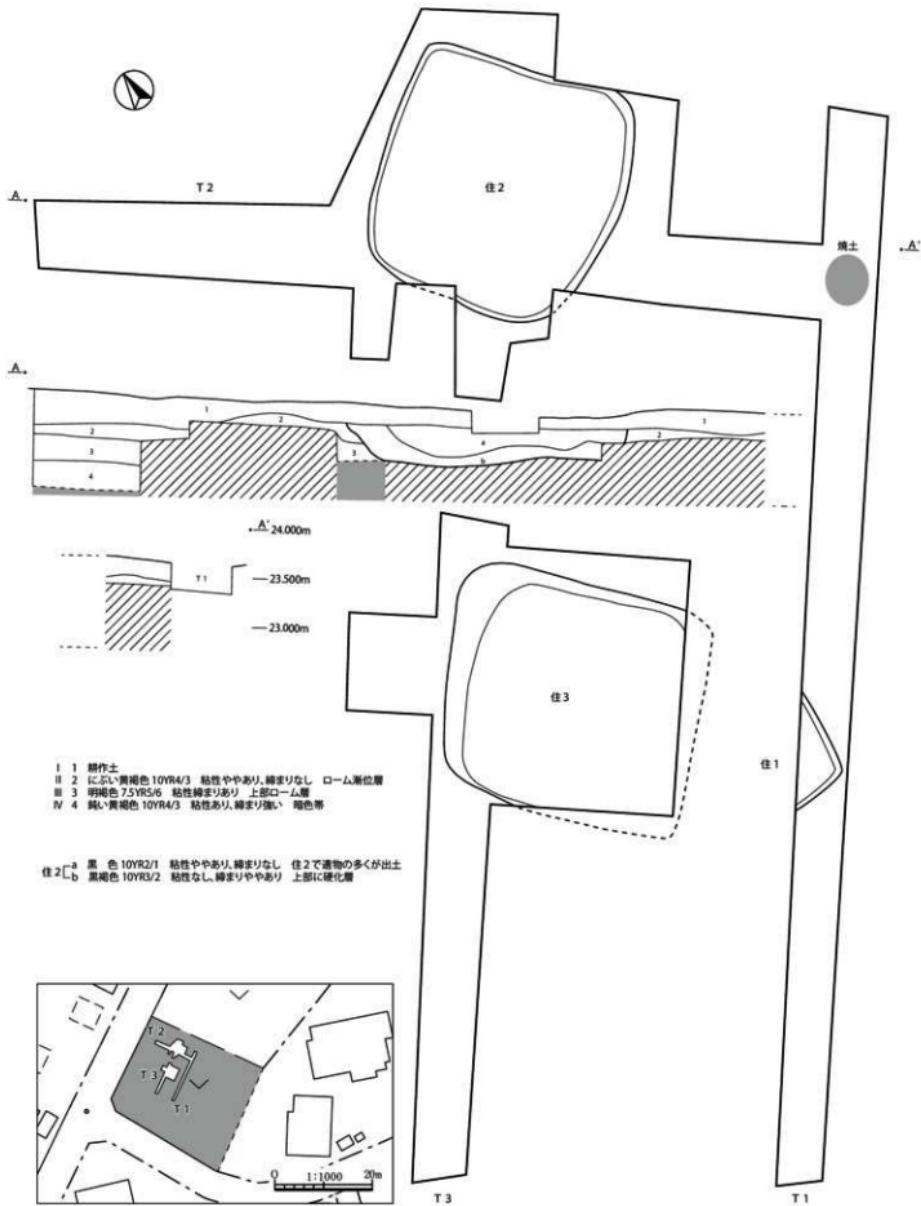
### (5) 出土遺物

出土した遺物は土師器片が中心であり、器壁の薄さや口縁部内面のハケ目などの特徴から古墳時代前期のものであると考えられる(第20図)。

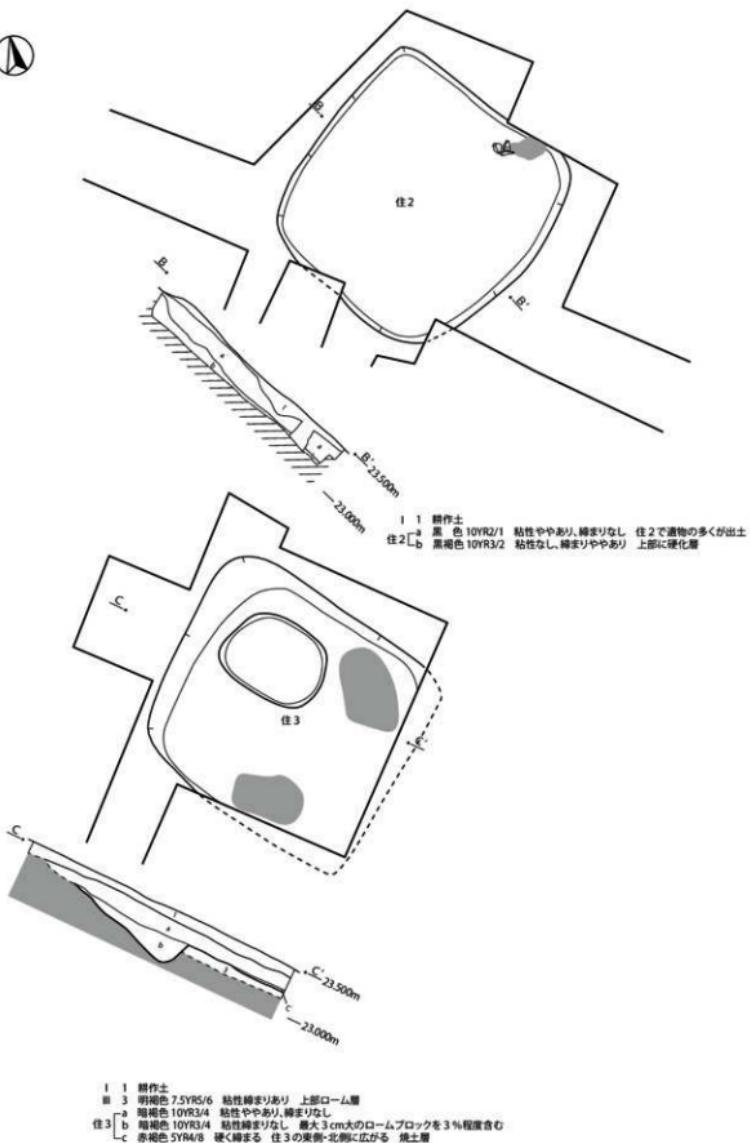
1はS字状口縁を有する小型の台付甕。胴部外面に2段の斜位ハケを施すが、内面頸部へのハケはない。器厚が0.3mm程度しかなく薄い。同一個体と思われる破片も出土したが復元には至らなかった。2・3は複合口縁を持つ甕の口縁部片である。2は内外面にハケを施し、口唇部を面取りしている。折り返し口縁ではない。3も内外面共にハケを施す。複合口縁部に異なる工具を使用する。口唇部にも亀裂がみられることから折り返し口縁ではない。6は口唇部に刻みを施す。單口縁の台付甕とした。内外面にハケを施し、内面を磨り消す。12は台付甕である。13は器台の脚部で穴はあいていない。外面上はハケが施され、その後磨かれている。17は器台の受け部であり、明瞭な屈曲を持つ。破損後に穿孔しており、紡錘車などに転用した可能性がある。剥落している。23は甕であり、頸部が剥落しており、胴部にハケを施した後に口縁部の整形を行っていることがわかる。24は堅型炉の炉壁中段の資料であり、表土からの出土である。外面上の赤色酸化はほとんどなく、スサを含む。25は陶器製の皿であり、口縁部外面にススが付くことから澄明皿とした。



第17図 日向新田遺跡の範囲と調査地



第18図 調査区位置と遺構配置



第19図 調査区位置と遺構配置

詳細な検討が必要となるが、太田市の『成塙向山古墳群』の調査報告書で深澤氏により行われた編年的特徴に照し合せると、古墳時代前期の特徴を持つ資料であると考えられる。市内の類例では、道溝遺跡の11号住出土の資料に遺物の特徴・組成が近い。

今後の資料の増加と共に、深澤氏が指摘したような画期を館林地域にも当てはめることができるかどうかは今後の課題である。

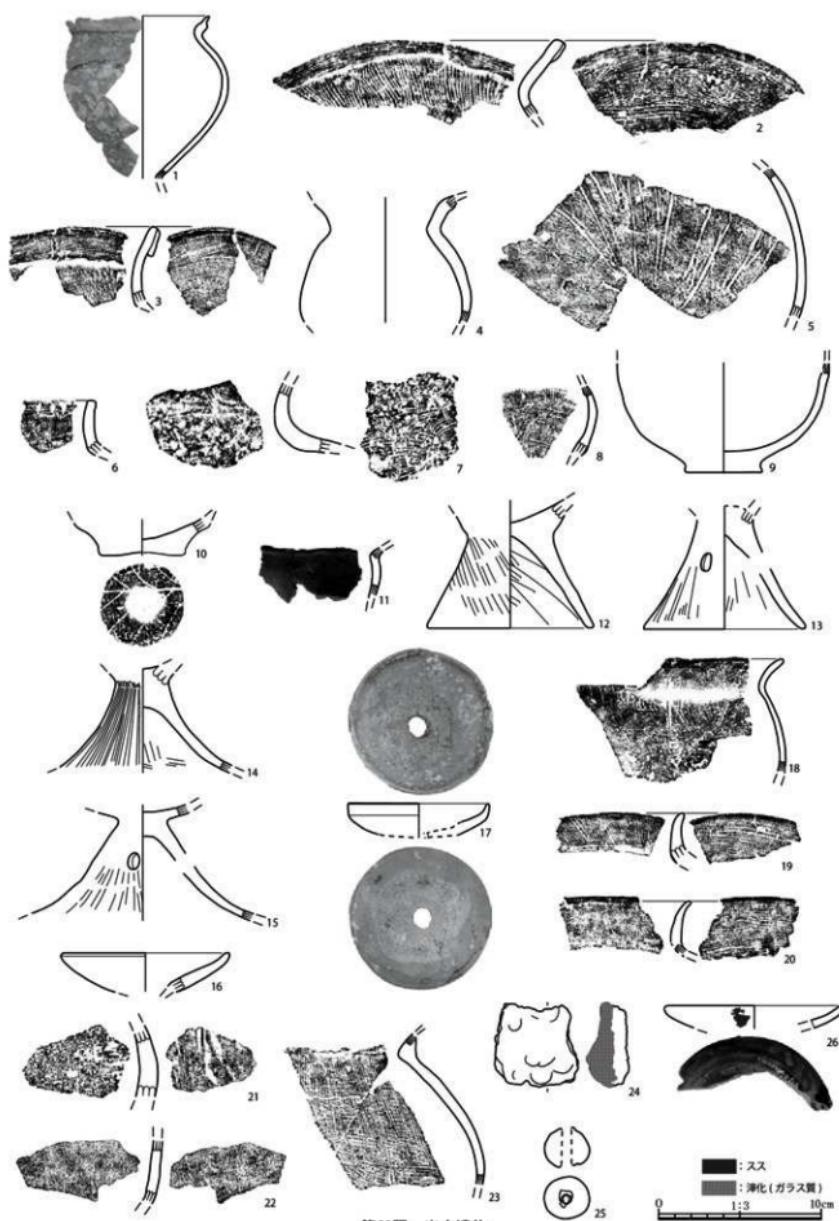
#### (6)まとめ

日向新田遺跡では初めて調査が行われた。

本地点では小規模であるが住居址が確認され、完形の個体はないものの遺物も多く出土した。多々良沼にせり出す台地上であり、市内でも類例の少ない古墳時代前期の集落であった可能性が高い。また、表土中からではあるが堅型炉の炉壁が出土しており(第20図-24)、現状として多くの鉱滓が確認されているのは遺跡の南に位置する多々良沼の水中であるが、堅型炉の操業場所を検討する上で貴重な資料となる。

今回の調査でもTIの表土直下で焼土が確認できたが、陶磁器を伴うことから近代のものと判断した。表土層の堆積が薄く、直下にローム層が堆積しているため検出することは難しいが、調査を実施する際は、鍛冶場遺構の可能性についても注視していく必要がある。多々良沼遺跡や松沼町遺跡との関連も含めて今後の調査が期待される。

調査の結果、保存をする遺構・遺物を確認できたが、深掘する合併浄化槽の設置部分から遺構は確認されなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第20図 出土遺物

## 【多々良沼遺跡】

遺跡番号 0006

時代種別 中世(散布地・生産遺跡)

日向新田遺跡にて表土より出土した鉱滓(21頁第20図24)の補完をするために、踏査で採集した資料(第22図-1・2)と地元の古老が採集した資料(第23図-3~5)の報告をあわせて行う。

### (1) 多々良地区に残る伝承と調査に至る経緯

地元の伝承では「日向村の地は、往古は原野なりしが、萬壽二年の頃、寶日向なる者來り、沼の北岸なる今の日向新田に居を構へ、沼の水質、鑄物に適すとて、踏査を据へ釜を鑄造したるに創まり、因りて村を日向と名附け、沼を多々良沼と稱す。多々良は踏査なり、今に其の地金糞を出す。」(『群馬縣邑樂郡多々良村誌』9頁)とある。つまり、万寿2(1025)年以降に「日向」や「多々良」という現在の地名の由来を求めることができ、日向新田遺跡が立地する場所に宝日向が住んでいたということである。また、伝承のとおり、遺跡の南に位置する多々良沼で地元の古老がカナクソと思われる資料を採集しており、平成31年3月に実見した結果、万寿2以前の古代製鐵関連の資料である可能性が高まり、現状を確認するために踏査を実施した。例年沼の最低水位は1月ごろであるが、既に時期を逸しており、膝から腰にかけて水に浸かりながらの踏査となった。

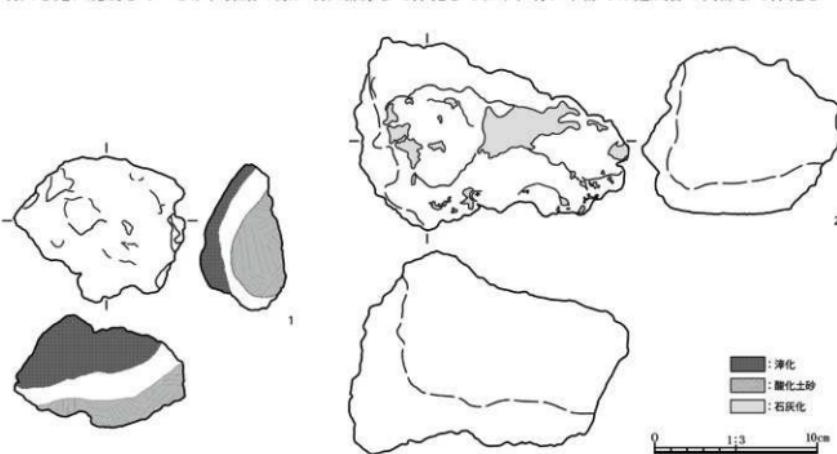
### (2) 遺跡と周辺の環境

「多々良沼遺跡」は館林市の西部にある中世の散布地・生産遺跡であるが、多々良沼内部に位置しており、冬の一時期を除いて水中に沈んでいる。北の台地上には日向新田遺跡、沼の南東部には奈良・平安時代とされる炭窯跡が確認された松沼町遺跡も立地している。

### (3) 資料報告

1は送風管(大口径羽口)付近の炉壁。内側は滓化しておりアーチ状を呈する。外側にはスサが多く入り、赤色酸化している。日向新田遺跡出土遺物と同様の部位と考えられる。2の内面は激しく滓化しており、木炭痕がわずかにみられる。底部の一部は熱を多く受けガラス化している。沼に沈んでいた影響で石灰化している。

3は炉壁下段の資料で、内面は激しく滓化し木炭の痕跡がある。石灰化している。4は大口径羽口である。羽口を先に焼成しているが、操業の際に羽口部分まで滓化しており、特に下部では送風管の内部まで滓化している。

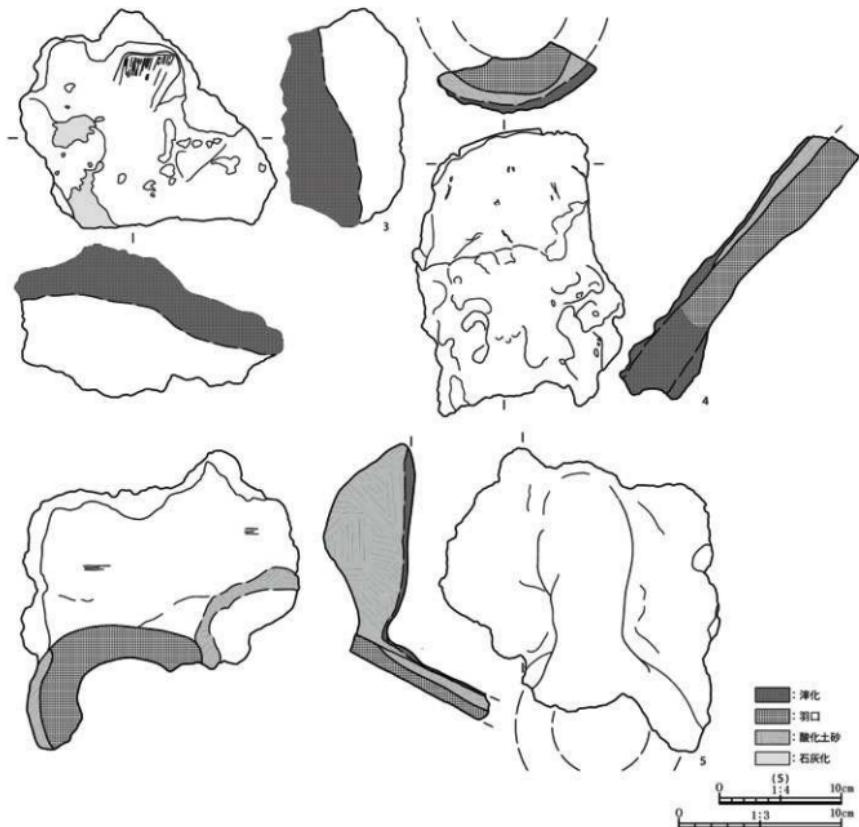


第22図 採取遺物

ている。送風管の角度は50度、内径7.5cm、外径12cmであり、スサを含む。5は送風管の残る炉壁である。炉壁に対する送風管の角度はやや銳角で28度、内径8cm、外径14cmであり、4と同様に先に羽口の焼成を行っている。

#### (4)まとめ

今回報告した資料は古代製鉄炉(堅型炉)の操業を示しており、炉壁と一緒に別に製作した送風管(大口径羽口)を用いる点は、多々良沼遺跡で使われた炉の形態的特徴の一つといえるであろう(第23図-4・5)。県内の堅型炉の操業年代は8世紀中葉～10世紀前半頃とされているが(笹澤2007)、日向新田遺跡と多々良沼遺跡では製鉄炉や鍛冶場遺構などは確認されておらず、沼で採集できる他遺物との共時性も不確かなため操業時期や場所は不明である。今回の表採地点は『迅速測図』でもすでに沼地であるが、炉の操業に水辺は不向きであり、多くの鉱滓が残る理由と操業当時の周辺環境の推定も課題である。以上から今後も補追調査の実施が必要となるが、あわせて日向新田遺跡の表土中からも炉壁片が出土している点や地元に残る宝日向の伝承についても考察していくなければならない。



第23図 採取遺物

## 6. 青山屋敷跡(平30A地点)

遺跡番号 0070  
時代種別 中世(城館跡)  
調査地 館林市花山町字大袋2308-6  
調査原因 個人住宅  
調査期間 平成30年10月26日～11月2日  
〔内5日間〕  
調査面積 約39m<sup>2</sup>

### (1) 遺跡と周辺の環境

「青山屋敷跡」は館林市の南東部にある中世の城館跡である。邑楽・館林台地上で、古城沼を北側に望む一段高い平坦面に広がっており、周辺は古くから住宅地として利用されてきたが農地も多く残る。



第24図 青山屋敷跡 A の範囲と調査地

本遺跡ではこれまで調査は実施されていない。

今回届出のあった土地は遺跡の中央付近に位置しかつては牡丹園であった。基準点の標高は21.166mである。

### (2) 調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、東西方向に2本のトレーナーを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

### (3) 基本層序

本遺跡の基本層序はI層～V層である(A地点ではI・II・IV層)。

I層は表土(層厚最大約100cm)である。以前にあった牡丹園の庭の部分であり、施設の撤去や造成の際に形成された古土層である。II層は暗褐色土層(10YR3/4)であり、粘性・締まりなし。陶磁器などが出土。III層はローム漸移層(にぶい黄褐色10YR4/3)粘性ややあり、締まりなし。IV層は上部ローム層(褐色10YR4/6)で、粘性・締まりあり。V層は暗色帶(にぶい黄褐色10YR4/3)、粘性あり固く締まる。クラックが入る。

### (4) 確認された遺構

土坑5基、溝1条、ピットがT1を中心に確認された。いずれも遺物は出土せず時期不明。

土坑1～3は堆積物・規模・形状も同様で、径1.2mで確認面より50cm程掘り込む。正円形に掘られており、桶のようなものを埋め込んだ可能性も考えられたがタガや底板との段差などの痕跡もなくその性格は不明である。土坑5は一部攪乱の影響を受けているが規模や堆積物は同様である。しかし、1～3より40cm以上掘り込んだところで水が染みてきたため掘削を中断したがさらに深く掘り込まれている。土坑1は黒色(10YR2/1)のラミナ状の堆積があり、一括性が高く埋め戻されたものと考えられる。根巻の可能性も考えられたが壁に根の痕跡がなく、底部も綺麗に掘り込まれていたため土坑とした。

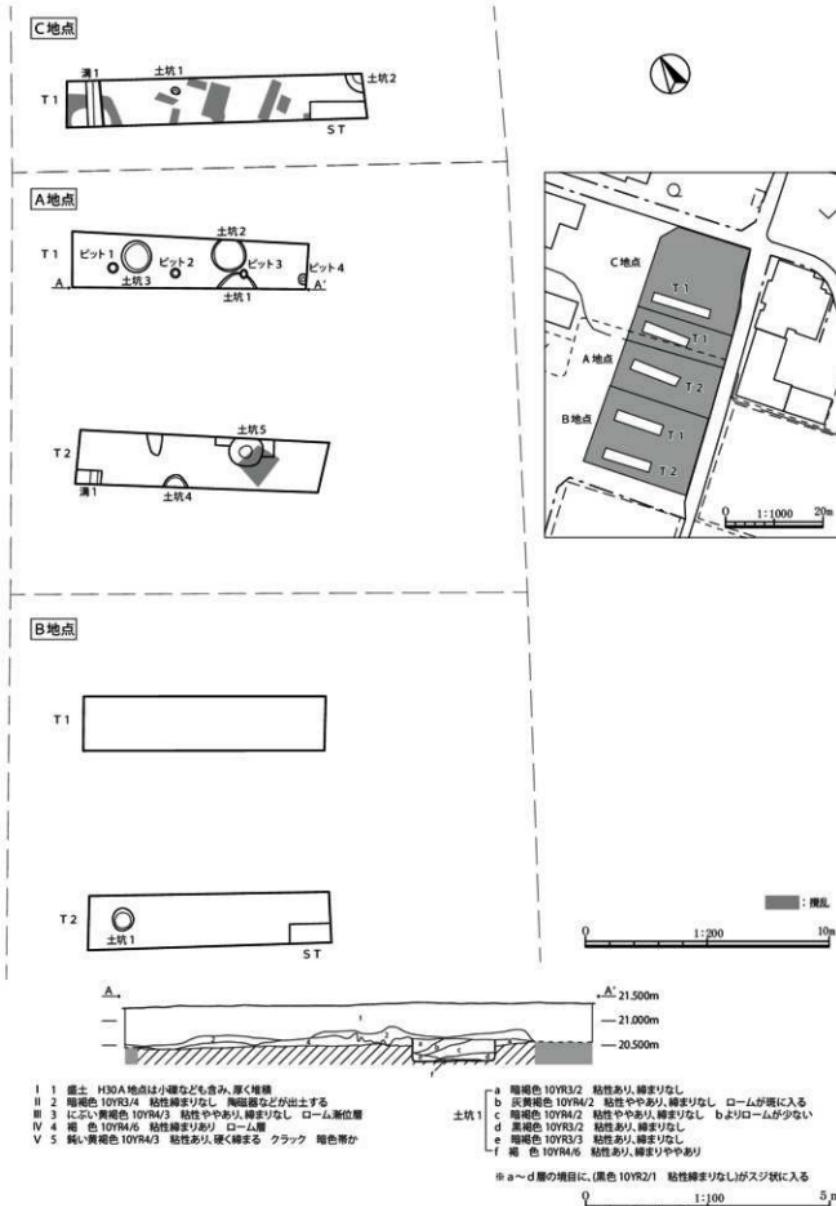
溝は確認面より20cm程度掘り込まれ、幅20cmで東西方向に延びている。

ピットの径は30cmで確認面より60cm程度掘り込み、約2.5m間隔で4つが東西方向に1列に並ぶ。柱間寸法が1間でなく、礎石もないためどのような構造物か不明である(横か)。しかし、土坑1との切り合いから少なくとも土坑より前に抜かれたものと考えられる。

いずれも出土遺物がないため時代が判然とせず、土坑に関してもロームブロックが入ることから近代のものの可能性もあるが、造成の際の攪乱が80cm以上堆積していることから少なくともそれ以前のものと考えられる。

### (5) 出土遺物

確認された遺物は陶磁器片などで近世・近代のものが中心であるが、小破片であり時期は判然としないものも多い。「青山屋敷」との関連が伺われる中世陶磁器は確認されなかった。



第25図 調査区位置と遺構配置

## (6)まとめ

青山屋敷跡では初めて調査が行われた。青山氏の屋敷であるという直接的な資料はないが、天保14年(1843)の「青山家由緒書」と共に、大袋に居住していたとの伝承もあり、文久元年(1861)の「館林領村鑑 羽附村」の中の「百姓林山」と書かれた方形の区画(青山屋敷跡範囲)との関連がうかがえる。今回の調査地は方形の区画内に位置し、「群馬県古城趾の研究 上巻」(山崎1978)でも青山屋敷の屋敷内として報告されている。今回の調査で確認された土坑列などは屋敷に伴う遺構である可能性が考えられる。遺物はほとんど出土しなかつたが、今後青山氏が転居したとされる享禄年間(1528～1532)以前の遺構・遺物が確認されれば文献記録の傍証となるであろう。

調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できたが、客土が100cm程度あり、保護層が確保されていることから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。

## 7. 青山屋敷跡(平30B地点)

遺跡番号	0070
時代種別	中世(城館跡)
調査地	館林市花山町字大袋2308-7
調査原因	個人住宅
調査期間	平成30年10月26日～11月2日 〔内5日間〕
調査面積	約40m <sup>2</sup>

### (1)調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせて、東西方向に2本のトレッチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げる、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

### (2)基本層序

平30A地点と同様。

### (3)確認された遺構

土坑1基が確認されたが遺物は出土せず時期不明。そのほかに重機の爪の跡が確認された。

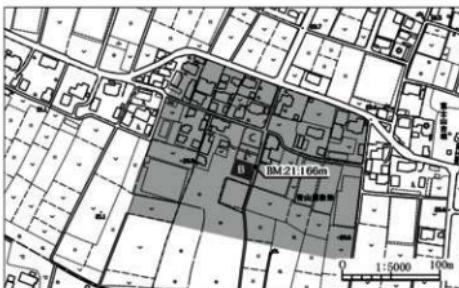
### (4)出土遺物

確認された遺物は陶磁器片などであるが、小破片であり時期は判然としないものが多い。近代の陶磁器が表土に散見される。

### (5)まとめ

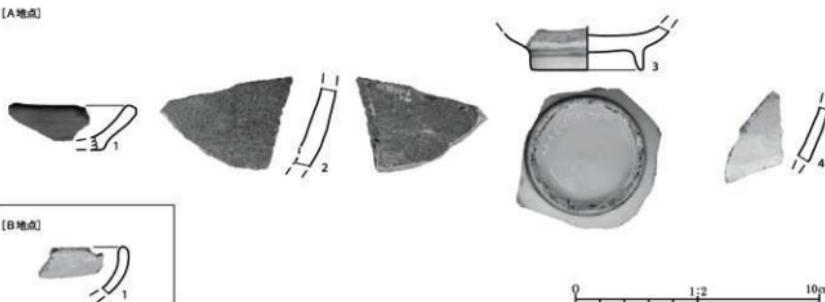
青山屋敷跡では初めて調査が行われた。同時に行われた「平30A地点」の隣地であり、客土の厚さもA地点ほどではなく、良好な保存状態が期待されたが、遺物・遺構とともにほとんど確認できなかった。

調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第26図 青山屋敷跡Bの範囲と調査地

[A地點]



第27図 A・B出土遺物

## 8. 青山屋敷跡(平30C地点)

遺跡番号 0070

時代種別 中世(城館跡)

調査地 館林市花山町字大袋2308-5

調査原因 個人住宅

調査期間 平成31年1月29日～2月1日  
(内3日間)

調査面積 約24m<sup>2</sup>

### (1) 調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、東西方向に1本のトレーナーを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

### (2) 基本層序

本遺跡の基本層序はI層～V層である。(※平30A地点、平30B地点と同様であるが、ローム漸移層は認識できなかった)

### (3) 確認された遺構

土坑2基、溝1条が確認された。いずれも遺物は出土せず時期不明。

土坑1はピット状であったが、対応するピットが確認できなかったため土坑とした。土坑2は平30A地点のものと同様の規模であるが、覆土の堆積にローム粒が混ざっておりより新しいものと推察される。

本地点の溝1はA地点の溝1と幅や形状だけでなく標高もほぼ同一レベルであることから関連も考えられるが、隣接するA地点のT1で確認できなかつたため不明である。ドーナツ状の掘込み(攪乱)の影響を受けている。

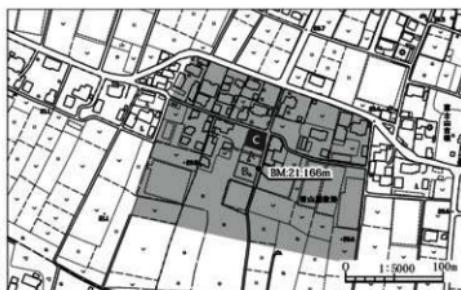
### (4) 出土遺物

確認された遺物は陶磁器片など20点程度であり、染付(第29図-1)や天目茶碗(第29図-3)も出土している。

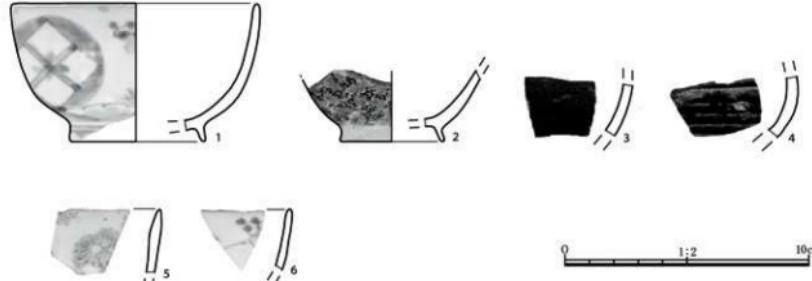
### (5) まとめ

青山屋敷跡の調査は今年度3地点目である。平30A地点で確認された円形の土坑(性格不明遺構)の範囲・性格の確認・検証などを目的として調査したが、同様の遺構は確認できなかつた。しかし、近世陶磁器も出土することから、青山氏が移転したとされる中世以降の土地利用についても考察していく必要がある。

調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかつたことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第28図 青山屋敷跡Cの範囲と調査地



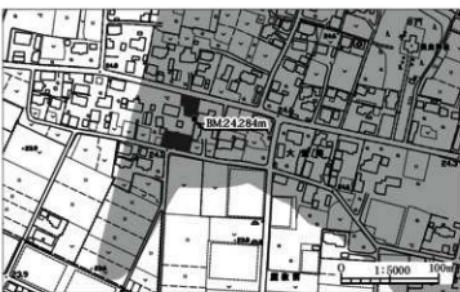
第29図 出土遺物

## 9. 岡野・屋敷前・岡遺跡(平30地点)

遺跡番号 0016  
時代種別 繩文・古墳・奈良・平安(散布地)  
調査地 館林市岡野町字大道南342-1、-6、-7、-8  
調査原因 その他開発(太陽光発電)  
調査期間 平成31年1月16日～1月23日  
〔内4日間〕  
調査面積 約45m<sup>2</sup>

### (1) 遺跡と周辺の環境

「岡野・屋敷前・岡遺跡」は館林市街地の北西にある繩文時代・古墳時代～平安時代の包蔵地である。邑楽・館林台地の北辺で、周辺は畠や住宅地として利用されている。



第30図 岡野・屋敷前・岡遺跡の範囲と調査地

本遺跡ではこれまでに6地点(昭和56・58、平元・24・28A・28B地点)で調査が行われている。

今回届出のあった土地は遺跡の西端に位置し、旧道の通る台地上の南の地点であり、基準点の標高は24.284mである。

### (2) 調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、南北方向に2本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

### (3) 基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅴ層である。

Ⅰ層は表土(層厚最大約120cm)である。現地表面、旧耕作土面、擾乱など。Ⅱ層は黒褐色土層(10YR2/2)であり、粘性・縮まりなし。Ⅲ層は上部ローム層(褐色10YR4/6)で、粘性・縮まりややあり。Ⅳ層は暗色帶(暗褐色7.5YR3/3)で、粘性・縮まりあり。T1で確認。Ⅴ層は中部ローム層(にぶい黄褐色10YR5/4)、粘性・縮まり強い。

### (4) 確認された遺構

T1で溝1条と土坑1基。T2で溝2条と土坑1基が確認された(T1より溝1～3、土坑1・2)。溝1・2は南北方向に延びている。共にローム層を掘り込んでおり、T1からは土師器が出土した。溝3は東西方向に延びており、最大幅2mの有段の溝で湿性の黒褐色土(7.5YR3/1)が堆積している。さらに60cm以上掘り込まれていることが想定されるため掘削は行っていない。土坑1は現地表面より2m程度掘り込んでいる。湧水はなかったものの底部の堆積土は湿性であること、台地の崖線部に位置していることから井戸などの可能性もある。近世陶磁器や焰烙の底部片が出土している。

### (5) 出土遺物

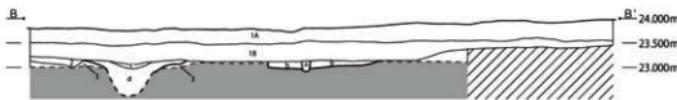
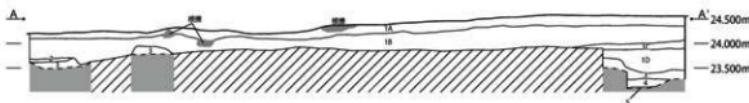
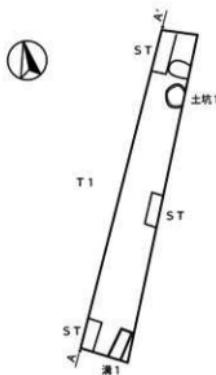
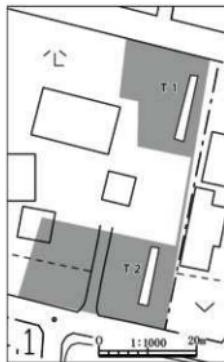
確認された遺物は、近世陶磁器片を中心に50点程度であるが、小破片であり時期の判然としないものも多い。焰烙の底部も出土した。第32図-1は赤彩が施された壺の破片である。内外面にハケを施している。土坑1の北で掘り込まれ、覆土中から大量の瓦が出土した擾乱があったが、隣地の民家に使用されている瓦と同様であり、近代以降にまとまって廃棄されたものと考えられる。

### (6)まとめ

岡野・屋敷前・岡遺跡ではこれまでに6地点で調査が行われている。特に昭和56年度の調査では繩文時代後期の住居址が確認されている。

本地点は、岡野・屋敷前・岡遺跡の西端に位置しており、古墳時代の住居址などは確認できず、彩色土器は出土したものの当該期の痕跡は全体的に希薄であった。古墳時代の集落は、本地点の東側の谷に近い台地上(平28B地点周辺)に展開している可能性が高い。堆積状況は、トレンチ北端で擾乱の影響を受けていたため不確かながら、標高差は約1mであった(調査対象地の現地表面の南端:23.7mと東端:24.8m)。当初、調査区北に東西に延びる旧道からならだかにローム層が落ち込んでいくことを想定していたが、旧道のすぐ南(調査地内)で段差状に落ち込んでいる状況が確認できた。

調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



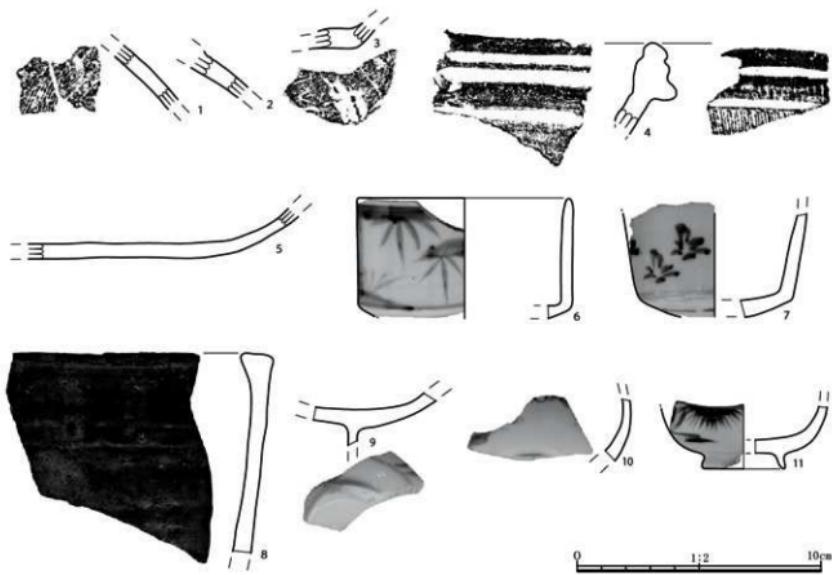
I 1A 表土  
 1B 旧耕作土 竹の根混在なども多い ローム粒が混じる  
 1C 稲や砂などを含む  
 1D 黒褐色 10YR2/3 ロームブロック(褐色10YR4/4 最大10cm程度)を3%程度含む  
 II 2 黒褐色 10YR4/6 粘性強めあり、多少浮遊土  
 III 3 黑褐色 10YR4/6 粘性強めあり、多少浮遊土  
 IV 4 黑褐色 7.5YR3/2 粘性弱めあり 單色帯  
 V 5 にぶい黄褐色 10YR5/4 粘性弱めあり強め 中部ローム層

溝2 [a] 黒褐色 10YR2/2 粘性ややあり、縮まりなし  
 [b] 褐色 7.5YR4/3 粘性ややあり、縮まりなし  
 溝3 [c] にぶい橙 10YR6/4 粘性縮まりなし、やや砂質  
 [d] 黑褐色 7.5YR3/1 粘性あり、縮まりなし やや湿性

0 1:100 5m



第31図 調査区位置と遺構配置



第32図 出土遺物

遺物観察表(1)

遺跡名	房版番号	出土地点	種類器種	時代	法線(cm) 長さ／幅／厚さ	調整の特徴、残存率など	備考
大袋5遺跡	6-1	T1	深鉢	縄文	19 17 10		前期
大袋5遺跡	6-2	T2	深鉢	縄文	32 47 09	RLを行下から左方に施す	前期
大袋5遺跡	6-3	T2	深鉢	縄文	25 25 08	口縁部片、RLを上から右に施す	前期
大袋5遺跡	6-4	T2	深鉢	縄文	21 39 10	RLを行方から右に施す	前期
大袋5遺跡	6-5	T2	深鉢	縄文	40 38 10	RLの刺突	前期
大袋5遺跡	6-6	T2	陶器 碗	近世	30 23 07		瀬戸・美濃
大袋5遺跡	6-7	T2	陶器 大日茶碗	近世	41 32 07		瀬戸・美濃
大袋5遺跡	6-8	T2	陶器 皿	近世	29 54 07		瀬戸・美濃
大袋5遺跡	6-9	T2	陶器 甕	13c ~ 14c	4.6 6.7 12	口縁部片	常滑
波原遺跡	8-1	T3	深鉢	縄文	6.9 6.1 1.1	胸部片、Sを左から右に施す	黑浜式
波原遺跡	8-2	T1	土師器 甕	不明	3.4 3.5 0.7		
波原遺跡	8-3	T1	土師器 甕	不明	1.8 1.3 0.6		
波原遺跡	8-4	T3	カワラケ	近世	(0.9) 3.6 0.6	底部片	
波原遺跡	8-5	T1	陶器 甕か すり鉢	近世	5.3 8.7 1.1		
波原遺跡	8-6	T3	土師器 甕	近世	4.8 4.7 0.8		瀬戸・美濃
波原遺跡	8-7	T3	陶器 甕か 土師器 甕	近世	2.2 2.7 0.5	口縁部片	瀬戸・美濃
波原遺跡	8-8	T3	陶器 甕	近世	1.1 1.1 0.3	口縁部片	
二本松遺跡	11-1	T2	陶器 甕	近世	1.8 2.3 0.4	口縁部片	
二本松遺跡	11-2	T2	陶器 甕か 甕	近世	(0.7) 4.5 0.4	底部片	
二本松遺跡	11-3	T2	陶器 甕	不明	1.7 2.7 0.6		
新宿二丁目遺跡	14-1	T1表土	カワラケ	不明	(2.4) 3.6 0.9	底部片	
新宿二丁目遺跡	14-2	T1表土	すり鉢	中近世	2.7 3.1 0.8		
新宿二丁目遺跡	14-3	T1表土	陶器 甕	近世	1.9 1.7 0.4	口縁部片	
新宿二丁目遺跡	14-4	T1表土	陶器 甕	近世	2.6 3.9 0.5		
新宿二丁目遺跡	14-5	T1表土	陶器 甕	古代	2.6 3.3 0.4	口縁部片	
新宿二丁目遺跡	14-6	T1表土	陶器 甕	古代	(0.9) 2.2 3.0	底部片	
新宿二丁目遺跡	14-7	T1表土	陶器 甕	近世	3.3 2.0 0.5		
新宿二丁目遺跡	14-8	T1表土	陶器 天日茶碗	近世	2.2 2.3 0.6		瀬戸・美濃
新宿二丁目遺跡	14-9	T1表土	陶器 甕	近世	2.9 3.5 0.4		
新宿二丁目遺跡	14-10	T1表土	陶器 半胴腹	近世	4.0 3.9 1.0	口縁部片	瀬戸・美濃
新宿二丁目遺跡	14-11	T1表土	染付 甕	近世	2.0 2.7 0.6		肥前系
新宿二丁目遺跡	14-12	T1表土	陶器 甕	近世	3.3 4.2 0.6		肥前系か
新宿二丁目遺跡	14-13	T1表土	染付 甕	中近世	(1.6) 2.2 0.5	底部片	
新宿二丁目遺跡	14-14	T1表土	陶器 甕か	近世	2.3 3.3 0.7	口縁部片	
青柳城跡	16-1	土坑	カワラケ	16c末 ~ 17c	2.7 (10.4) 0.6	底部回転糸切痕、1/4残存	
青柳城跡	16-2	土坑	土師器 甕	近世	(5.4) (9.0) 0.4	口縁部片	
青柳城跡	16-3	土坑	丸 甕	近世以降か	4.1 3.2 2.1	表面に滑石	
青柳城跡	16-4	土坑	丸 甕	古代以降か	6.8 8.1 2.0	表面に滑石	
日向新田遺跡	20-1	T2E2復土	土師器 甕	古墳前期	(9.5) (10.0) 0.3	口縁部から胸部片、S字口縁	
日向新田遺跡	20-2	T2E2復土	土師器 甕	古墳前期	4.6 12.7 7.3	複合口縁。内外面にハケを施す	
日向新田遺跡	20-3	T3E3	土師器 甕	古墳前期	4.6 6.3 0.5	複合口縁。内外面にハケを施す	
日向新田遺跡	20-4	T3E3	土師器 甕	古墳前期	(7.5) (11.2) 0.6	口縁付近から胸部片、諸らかに磨いている	
日向新田遺跡	20-5	T2E2	土師器 甕	古墳前期	9.2 15.4 0.5	胸部	
日向新田遺跡	20-6	T2E2復土	土師器 甕	古墳前期	3.3 3.2 0.6	口縁部に刻みを施す	
日向新田遺跡	20-7	T2E2	土師器 甕	古墳前期	4.6 6.4 0.7	頭部、内外面にハケを施す	
日向新田遺跡	20-8	T2E2復土	土師器 甕	古墳前期	4.2 4.2 0.5	頭部。外側にハケを施す	
日向新田遺跡	20-9	T3E3	土師器 甕	古墳前期	(6.7) (14.1) 0.6	底部から胸部片	
日向新田遺跡	20-10	T3E3	土師器 甕	古墳前期	(1.9) 7.1 1.2	底部片、業脈痕あり	

遺物観察表(2)

遺跡名	図版番号	出土地点	種類器種	時代	法量(cm) 長さ／幅／厚	満整の特徴、残存など	備考
日向新田遺跡	20-11	T3住3	土師器 壺	古墳前期	30 6.1 0.5	頭部片、内外面にハケを施す	
日向新田遺跡	20-12	T3住3	土師器 台付壺	古墳前期	(75) (10.2) 0.7	脚部片	
日向新田遺跡	20-13	T3住3	土師器 壺	古墳前期	(76) 9.9 0.5	脚部片	
日向新田遺跡	20-14	T3住3	土師器 壺	古墳前期	(56) (11.7) 0.5	脚部片	
日向新田遺跡	20-15	T3住3	土師器 壺	古墳前期	(79) 13.8 0.7	脚部片	
日向新田遺跡	20-16	T3住3	土師器 壺	古墳前期	(24) (10.2) 0.6	壺部片	
日向新田遺跡	20-17	T3住3	土師器 壺	古墳前期	(19) (8.6) 0.6	壺部片、幼獅子耳に転用か	
日向新田遺跡	20-18	T3住3	土師器 壺	古墳前期	62 9.5 0.6	口縁部片	
日向新田遺跡	20-19	T3住3腹上	土師器 壺	古墳前期	25 6.6 0.6	口縁部片、内外面にハケを施す	
日向新田遺跡	20-20	T3住3腹上	土師器 壺	古墳前期	32 5.4 0.4	口縁部片、ハケの後ナテ、内面ハケ	
日向新田遺跡	20-21	T3住3腹上	土師器 壺	古墳前期	41 6.6 1.0		
日向新田遺跡	20-22	T3住3腹上	土師器 壺	古墳前期	34 7.0 0.6		
日向新田遺跡	20-23	T3住3腹上	土師器 壺	古墳前期	88 6.0 0.4	口縁部片、ハケ目施文後に口縁部作成	
日向新田遺跡	20-24	表土	炉壁	8c後半～10c前半	52 52 0.3	堅型炉の炉壁中段	
日向新田遺跡	20-25	T3住3	土玉	古墳前期	22 23 —	完形	
日向新田遺跡	20-26	T3住3土玉	陶磁器皿	近代	(14) (9.1) 0.3		
多々良沼遺跡	22-1	表土(着差)	炉壁	8c後半～10c前半	85 9.5 6.6	返風管(大口径羽口)付近の炉壁、スサを含む	
多々良沼遺跡	22-2	表土(着差)	炉壁	8c後半～10c前半	157 12.7 11.5	底部周辺の炉壁、外間に淳化していない部分がわずかに残る	
多々良沼遺跡	23-3	表土	炉壁	8c後半～10c前半	158 13.4 0.9	炉壁中段、内面は激しく淳化 本炭灰	
多々良沼遺跡	23-4	表土	大口径羽口	8c後半～10c前半	163 12.6 3.4	スサを含む	
多々良沼遺跡	23-5	表土	大口径羽口と炉壁	8c後半～10c前半	230 24.9 7.0	スサを含む	
青山原窯H30A	27-1	T2	カワラケ	古代	22 30 0.5	口縁部片	
青山原窯H30A	27-2	T2	陶磁器 碗	近代	34 5.2 0.7		
青山原窯H30A	27-3	T2	柴付 碗	近代	(17) 6.4 0.7	底部片	肥前系
青山原窯H30A	27-4	T2	陶磁器 碗	近世	23 23 0.4		
青山原窯H30B	27-1	T2	陶磁器 碗	近世	20 25 0.4	口縁部片	瀬戸・美濃
青山原窯H30C	29-1	T表土	柴付 碗	中近世	57 (10.2) 0.5	1/4残存	肥前系
青山原窯H30C	29-2	T表土	陶磁器 碗	近代	(26) 4.0 0.7	底部片	
青山原窯H30C	29-3	T表土	柴付 大口茶碗	近世	21 28 0.5		瀬戸・美濃
青山原窯H30C	29-4	T表土	陶磁器 腰罈茶碗	近世	27 31 0.5		瀬戸・美濃
青山原窯H30C	29-5	T表土	柴付 碗	近世	27 22 0.3	口縁部片	肥前系
青山原窯H30C	29-6	T表土	陶磁器 碗	近代	27 27 0.4	口縁部片	
岡野・星敷前・同道跡	32-1	T1	土師器 壺	古墳	29 4.1 0.6	赤彩	
岡野・星敷前・同道跡	32-2	T1	土師器 壺	古墳	23 4.2 0.7		
岡野・星敷前・同道跡	32-3	T1	陶器 壺	近世	(0.8) 5.2 0.9	底部片	
岡野・星敷前・同道跡	32-4	T1	陶器 手すり鉢	近代	42 6.8 1.5	口縁部片	
岡野・星敷前・同道跡	32-5	T1	培塿 壺	中近世	68 10.2 0.6	底部片	
岡野・星敷前・同道跡	32-6	T1土切裏土	柴付 碗	近世	(50) (8.8) 0.4	1/3残存	肥前系
岡野・星敷前・同道跡	32-7	T1土切裏土	柴付 碗	近世	4.6 4.3 0.5		肥前系
岡野・星敷前・同道跡	32-8	T1	陶器 平胴	近代以降か	7.9 7.2 0.7	口縁部片	
岡野・星敷前・同道跡	32-9	T1	柴付 碗	近世	(20) 4.7 0.7	底部片	肥前系
岡野・星敷前・同道跡	32-10	T1	柴付 碗	近世	2.6 5.0 0.4		肥前系
岡野・星敷前・同道跡	32-11	T1土切裏土	柴付 碗	近代	(25) 3.9 0.6	底部片	

# 写 真 図 版



## 大袋 5 遺跡(平30 地点)

図版 1



1 土木重機による掘削



2 トレンチ 1 溝1(北面)



3 トレンチ 1 性格不明遺構(西から)



4 発掘作業風景



5 トレンチ 2 精査後(南から)



6 トレンチ 2 土層断面(西面)



7 調査完了

## 笠原遺跡(平30地点)

図版2



1 調査区全景



2 土木重機による掘削



3 トレンチ1精査後(西から)



4 トレンチ2精査後(北から)



5 トレンチ3精査後(北から)



6 トレンチ2土層断面(西面)



7 調査完了

## 二本松遺跡(平30地点)

図版3



1 調査区全景



2 土木重機による掘削



3 トレンチ1精査後(北から)



4 トレンチ2精査後(北から)



5 トレンチ2深掘部土層断面(北面)



6 調査完了

## 新宿二丁目遺跡(平30地点)

図版4



1 土木重機による掘削



2 トレンチ1土層断面(南面)



3 トレンチ1精査後(南から)



4 トレンチ3精査後(西から)



5 トレンチ4精査後(東から)



6 トレンチ4水路跡(北面)



7 調査完了

## 日向新田遺跡(平30地点)

図版5



1 調査区全景



3 トレンチ2住居2精査前(南西から)



2 トレンチ2精査前(東から)



4 トレンチ2住居2遺物出土状況(南から)



5 トレンチ2深掘部土層断面(西面)



6 トレンチ2住居2北端の礫



7 トレンチ2住居2北端の礫



8 トレンチ 2住居 2土層断面(南から)



9 トレンチ 2住居 2出土遺物



10 トレンチ 2住居 2精査後(南西から)



11 トレンチ 3住居 3精査前(北西から)



12 トレンチ 3住居 3土層断面(北から)



13 トレンチ 3住居 3精査後(北東から)



14 土木重機による埋め戻し



15 調査完了

## 青山屋敷跡(平30A地点)

図版7



1 調査区全景



2 土木重機による掘削



3 レンチ1精査後(西から)



4 レンチ1土坑3



5 レンチ1土層断面(南面)



6 レンチ2精査後(東から)



7 土木重機による埋め戻し

## 青山屋敷跡(平30B地点)

図版8



2 土木重機による掘削



2 レンチ2精査前(西から)



3 レンチ2精査後(西から)



4 レンチ1精査後(東から)



5 レンチ2土層断面(南面)



6 土木重機による埋め戻し

## 青山屋敷跡(平30C地点)

図版9



1 調査区全景



2 土木重機による掘削



3 精査前(東から)



4 精査後(東から)



5 深掘部土層断面(東面)



6 溝1(南面)



7 調査完了

岡野・屋敷前・岡遺跡(平30地点)

図版10



1 調査区全景



2 土木重機による掘削



3 トレンチ1精査後(北から)



4 トレンチ2溝2



5 トレンチ2溝3

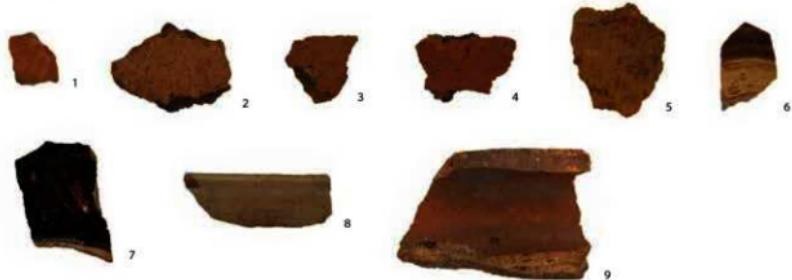


6 調査完了(1)

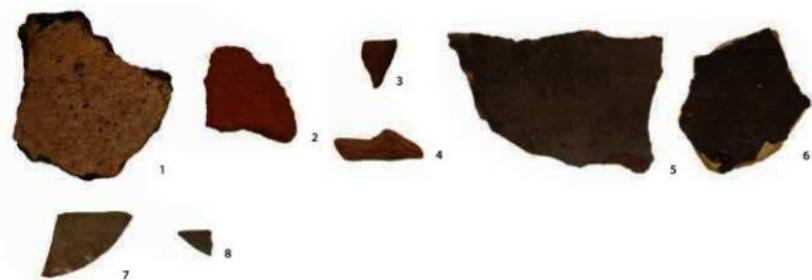


7 調査完了(2)

大袋遺跡



菅原遺跡



二本松遺跡



新宿二丁目遺跡



青柳城跡



日向新田遺跡 (1/3)



多々良沼遺跡 (1/3)



2



3

4



5(1/4)

図版 14

青山屋敷 A 地点



青山屋敷 B 地点

青山屋敷 C 地点



岡野・屋敷前・岡遺跡



**抄 錄**

ふりがな	たてばやししないいせきはっくつちょうさほうこくしょ					
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書					
副書名	平成30年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査				卷次	
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書				シリーズ番号	第57集
編集者名	宮田圭祐				編集機関	館林市教育委員会
編集機関所在地	〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号 TEL 0276-74-4111 FAX 0276-74-4113					
発行年月日	2019(令和元)年9月30日					
市町村コード	102075					
所取遺跡	所在地	遺跡番号	緯度	経度	調査期間	調査面積 調査原因
大袋5遺跡 (平30地点)	館林市花山町6袋26-7	0068	36° 14' 17"	139° 33' 11"	20180421 ~ 20180503	約73m <sup>2</sup> 店舗
笠原遺跡 (平30地点)	館林市鶴巣町字笠原1882-4	0101	36° 13' 51"	139° 31' 49"	20180605 ~ 20180619	約63m <sup>2</sup> その他開発(健光分譲用地)
二本松遺跡 (平30地点)	館林市大谷町二本松28-2	0050	36° 14' 40"	139° 30' 48"	20180919 ~ 20181002	約52m <sup>2</sup> 個人住宅
新宿一丁目遺跡 (平30地点)	(從崩地)館林市新宿一丁目138-6 (後換地)西部第一土地区画整理事業B街区	0061	36° 14' 25"	139° 31' 34"	20181016 ~ 20181023	約145m <sup>2</sup> その他建物(分譲住宅)
日向新田遺跡 (平30地点)	館林市日向町字新田1572-3	0005	36° 15' 42"	139° 29' 54"	20181024 ~ 20181101	約28m <sup>2</sup> 個人住宅
青山屋敷跡 (平30A地点)	館林市花山町字大袋2308-6	0070	36° 14' 7"	139° 33' 31"	20181026 ~ 20181102	約39m <sup>2</sup> 個人住宅
青山屋敷跡 (平30B地点)	館林市花山町字大袋2308-7	0070	36° 14' 8"	139° 33' 31"	20181026 ~ 20181102	約40m <sup>2</sup> 個人住宅
青山屋敷跡 (平30C地点)	館林市花山町字大袋2308-5	0070	36° 14' 9"	139° 33' 31"	20190129 ~ 20190201	約24m <sup>2</sup> 個人住宅
岡野・堀敷前・岡野遺跡 (平30地点)	館林市岡野町字大道南342-1	0016	36° 15' 41"	139° 31' 28"	20190116 ~ 20190123	約45m <sup>2</sup> その他開発(太陽光発電)
遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
大袋5遺跡 (平30地点)	散布地	平安	溝4、土坑3、性格不明遺構2	繩文土器片、土器片、陶磁器片		
笠原遺跡 (平30地点)	散布地	旧石器、縄文、平安	なし	縄文土器片、陶磁器片		
二本松遺跡 (平30地点)	散布地	縄文、古墳、平安	なし	陶磁器片		
新宿一丁目遺跡 (平30地点)	散布地	縄文、中世、近世	溝1、水路跡	石器、陶磁器片		
日向新田遺跡 (平30地点)	散布地	縄文、中世、近世	住居址3	土師器、鉄鋸、陶磁器片	堅型炉、壁片	
青山屋敷跡 (平30A地点)	城館址	中世	溝1、土坑5、ピット	陶磁器片		
青山屋敷跡 (平30B地点)	城館址	中世	土坑1	陶磁器片		
青山屋敷跡 (平30C地点)	城館址	中世	溝1、土坑2	陶磁器片		
岡野・堀敷前・岡野遺跡 (平30地点)	散布地	縄文、古墳、奈良、平安	溝3、土坑2	土師器、培塿、陶磁器片		

---

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第57集

## 館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成30年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

---

編集・発行 館林市教育委員会  
〒374-8501 群馬県館林市城町1番1号 電話0276-74-4111  
印 刷 上武印刷株式会社  
発行年月日 令和元年9月30日

---